

3位

浜村 礼子

「ありがとうと言いたくて」

「ありがとう」と言いたくて、新盆の貴女に会いに行きました。

貴女が亡くなったのは、昨年十二月寒い日でした。

突然のお別れに本当にびっくりしました。

涙顔の私に御主人が、

「ガンの痛さで寝れない時は良く効く薬だと言って何度も読み返していました。」と枕元にあった封筒の束を渡してくれました。

それは五十年近く前の古い私と貴女の文通の手紙でした。

黄ばんだ絵柄の便箋には、大きくはみ出しそうな元気な字、

将来の夢や、不安など眩しい位の青春時代、中学生の自分との対面でした。

手紙は不思議な物で、時が過つとなつかしさより、

背中を押す大きな力があるのです。

実は私も貴女の手紙で辛い時には勇気を貰っていたのです。

病院のベッドで息子さんが、「母さん何が一番欲しい」と尋ねた時、

天井を見つめて、「青春」と言ったそうですね。

どんな気持で手紙を読み返していたのですか。

あの頃に戻れたら、どんな人生を歩んでいたのでしょうか。

団塊世代に生れ競争社会の中で自分流に生きたのです。

日本舞踊の師匠として、お弟子さんを育て、

又、お年寄りには楽しい歌謡曲に振り付けをして、生き甲斐を与えたのです。

六十二年と短く早く逝ったけれど、通夜の大勢の方々に愛と優しさを心に宿して、踊りに生きた貴女は格好良かったですよ。

りっぱな人生でした。

ありがとう。

これが返事のない最後の手紙となりました。

私に戻ってきたむかしの文通の手紙は往復一対となりました。

今度出会えた時は二人で読み返して笑いましょう。

それまで私が預っておきます。

「かよちゃん」見えますか、お墓の囲りには大好きな桜の木が沢山あります。

春には青空の大舞台で、桜吹雪の中、悠々と舞って下さい。

さようなら。